

- 対象地域
広島県山県郡北広島町
(西中国山地国定公園)
- 設立日: H16.11.7
- 構成員数: 31人
- 全体構想作成日: H18.3.31
- 実施計画作成日: H18.10.30
(R2.3月現在)

やわたしつげんしぜんさいせいきょうぎかい

八幡湿原自然再生協議会

再生
目標

「命の環 つなげる」をキャッチフレーズに、牧草地造成前の昭和30年代前半頃の湿原生態系を再生する。

【事務局】

730-8511
広島市中区基町10-52
広島県自然環境課
野生生物グループ内
電話: 082-513-2933



本地域は、広島県の北西部に位置し、1,000m級の山に囲まれた標高800mの盆地です。また、ヌマガヤーマアザミ群集に代表される中間湿原が点在し、自生のものとしては貴重なカキツバタが生育しています。

しかし、牧場化に伴う排水施設や道路の整備が原因と思われる湿原の乾燥化により、周辺部からアカマツやイヌツゲ等の木本類が侵入し、希少種の生育環境が悪化しています。このため、自然生態系の保全・再生のための計画を作成、湿原環境の再生に向けた取り組みを進めています。

活動報告

自然再生地の保全・管理についてありがとうございます。

【報告者】八幡湿原自然再生協議会 保全・管理部会 内藤順一

1 現状

2009年の八幡湿原自然再生地整備事業(土木工事)終了後、経年経過(約10年)により水路が壊れるなどしたため、幹線導水路及び補助導水路の機能不全から事業地全体へ配水ができなくなり、事業地の乾燥化が進行しました。このため、私が活動する保全・管理部会では、2017年から3回/年のイベント等を活用し、事業終了時の姿に戻すとして、再度の湿原化のための維持管理作業を進めてきました。

2 生物調査から得た知見

私は協議会設立から少し遅れ、動物の専門員という立場で協議会に参加しました。

現在も継続して事業地で生物調査を実施していますが、自然再生整備事業の当初の動植物等モニタリング調査では、私の専門とする両生類や魚類については事前調査がされていなかったため、指標を基にした評価ができず苦労していました。

そこで、両生類は止水性小型サンショウウオが事業地(補助導水路)で繁殖し、魚類はコンクリート水路の砂泥にスナヤツメが生息することを湿原化の目標にしました。2010年にはニホンヒキガエルが2か所で繁殖し、止水性小型サンショウウオは2014年までは順調に事業地へ侵入し繁殖していましたが、以降、侵入は止まり確認できなくなりました。

調べてみると、第一取水堰右岸、第二取水堰の右岸・左岸、第三取水堰の左岸の幹線導水路の取水口が埋まり、補助導水路が機能していないことがわかりました。

また、事業地で放牧の仕事をしておられた町職員から往時の様子を聞き取ると、周辺からの流れ込み(コンクリート水路になる前の本流ではない)には止水性小型サンショウウオが生息していたというのです。現在も止水性小型サンショウウオが確認されるのは補助導水路(横方向)ではなく、縦方向の流れです。



【写真】: (左) スナヤツメ (右) 止水性小型サンショウウオ (下) 日本山岳会広島支部ほか「山の日」ボランティアの皆様

3 今後の課題

当初の「八幡湿原自然再生全体構想(2006.3)」や八幡湿原自然再生事業実施計画(2006.10)では順応的な整備・管理手法の検討がなされています。例えば、「期待した効果を得ることができそうにない場合や、残存している湿原に悪影響を及ぼしていることが確認された場合は、整備手法を見直す必要がある。事業実施後も、継続してモニタリングを実施し、維持管理方法や改修方法を検討していく予定である。」また、「本事業においては、水路の補修や草刈りといった維持修繕に加え、モニタリング結果に基づき、水路の再整備や水路の塞き止め等の小規模の改修が長期にわたって必要になると考えられる。」「当面は協議会が主体となり、ボランティア等を募集し、観察会等と併催してこれらの作業を実施していく予定であるが、長期的には西中国山地自然史研究会や高原の自然館(北広島町教育委員会)を中心とした新たな組織作りを行い、管理運営方針を検討していく必要がある」と記されています。

今後の課題として、これまでは、順応的に湿原になるのを待つ10年間でしたが、これからは、能動的に行動する10年にしたい。そのためにも事業終了後の維持管理手法を総括し、具体的に実施計画を見直すことで、新たな維持管理の組織作りを行い、活動資金の調達とボランティアの継続的な確保の仕組みづくりが必要になると思います。

